

言語行動から見る新語形成プロセスについて

—— 熟議を利用して ——

On the New Word Formation in Terms of Verbal Behavior

—— Using a Deliberation ——

黒崎 貴史*

KUROSAKI Takashi

(要旨)

本稿の目的は、新語が形成される際に、どのような手順を踏んで、どのように決定しているのかといった問題を解明することにある。本稿では、「新語が形成される場として「熟議」空間が存在し、その中で複数の参加者の熟議を通して新語が作り出されていく」というように新語形成プロセスを設定した。そして、参加者の言語行動を観察することによって、新語形成のダイナミズムを観察できるようになると考えた。その結果、次のような新たな知見が明らかになった。

- ①「表態」と「新語形成フェーズ」という談話単位を新たに設定することによって、新語形成談話の展開を把握した。
- ②新語形成フェーズは、「認知」「枠組み」「提案」「審議」「脱線」の5つに分類することができ、これらを行き来して新語の形成・決定を行っている。
- ③新語形成談話は認知から始まり、その後枠組みへと繋がる。このプロセスを経て提案へと繋がる。
- ④認知は新語の経験に関わる言語行動と、枠組みは新語の語形や語種、読みに関わる言語行動と、提案は既出の情報を総括する言語行動と、審議は新語の是非を問う言語行動との結びつきがそれぞれ強い。
- ⑤「新語を形成するまでの過程に関する議論」と「形成された新語に関する議論」の切り替わりの際、沈黙などの停滞の言語行動がきっかけとして現れる。

キーワード：言語行動、新語、語形成プロセス、談話、談話単位

1. はじめに

新語形成プロセスに関する研究は、語形成論において多くの研究者によって研究されている。例えば、以下のようなものが挙げられる。

- (1) ポケ(ット) + モン(スター) = ポケモン

「ポケモン」という新語は、「ポケット」と「モンスター」という単語を結び付けて「ポケットモンスター」という複合語を形成し、それぞれの語頭2モーラ以外を省略するというプロセスを経ている。この場合、「ポケモン」は複合語短縮という語形成プロセスを経ているといえる。このように、従来の語形成プロ

* 山口大学大学院 博士後期課程 東アジア研究科アジア教育開発コース (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

セスといえば、形成方法の類型化など、語の形式的な問題を扱うのが主であった。

ここで、新語の定義を確認してみる。『言語学大辞典 第6巻 術語編』(1996:745)には、「従来存在しなかった事物や概念を表わすために新しく単語や表現が作られること、またそのようにしてできた単語や表現をいう。(中略)一般に、社会的変動が大きければ大きいほど語彙の変動も大きく、新語形成とそれに伴う廃語化が起りやすい。」とある。このように、社会と密接な関わりを持つ新語を研究対象として扱うのであれば、単語だけを形式的に観察するのではなく、言語社会の中にいる人間がどのように新語を形成していくのか。そこには、どのような言語行動や思考プロセスがみられるのか。こういった問題も扱うべきだろう。

本稿の目的は、新語形成に関わる人間(参加者)が、どのような言語行動を取りながら、どのようなプロセスを辿って、新語形成を実行していくのか、という問題を解明することにある。語に焦点を当てるのではなく、それを作る人間に焦点を当てていると言ってもいいだろう。この方法をとることで、新語が言語社会に生み出されるまでの形成プロセスだけでなく、どのような新語が捨てられ、どのような新語が選ばれるのか。また、これまで表出されなかった形成パターンを観察することも可能ではないかと考えている。

言語行動も問題として扱うのは、音声言語だけを見たのでは新語形成の問題を扱いきれないだろうという点と、新語形成における言語行動というものが存在するのではないかとこの点を考慮したためである。

2. 先行研究

本節では、形態論及び社会言語学の立場か

らの新語に関する先行研究を挙げた上で、本稿での考え方を示す。

2.1. 従来の語形成研究

影山・斎藤(2013)は、和語や漢語、外来語などの語種それぞれの語形成上の具体的な事例を述べている。和語の特徴として、動詞をつくる接尾辞が多いこと、動詞の連用形を名詞に転成すること、反復語によく使われることを挙げている。漢語の特徴としては、二字漢語が基本であること、「人殺し→殺人」のように、動作や出来事を表す動詞的名詞は和語と順序が逆になることを挙げている。外来語の特徴としては、複合語短縮に使われることが多いことを挙げている。

また、新語の造語法については、米川(1989)や窪蘭(2002)らによって類型化されている。米川(1989)では、借用法、合成法、派生法、類推法、省略法、もじりに分類している。これらに加え窪蘭(2002)では、混成語、逆形成、異分析、固有名詞から普通名詞、普通名詞・句表現から固有名詞、固有名詞から別の固有名詞、音の入れ替え各々の観点によってその種類は異なるが、借用(外国語や方言、古語を使用する)／複合／省略(頭文字化も含む)／音声的な面(オノマトペや音の転化、音調なども含む)といった問題は、ほとんど共通したものといってもよいだろう。

2.2. 新語・流行語に関する研究

鎌水(2013)では、大字単位での若者語の言語地図を作成し、若者語の地域差と普及過程について論じた。言語地図の作成によって、使用地域が限定された若者語の存在を認めた。さらに、「各地域の大都市の中心部で早く普及し、周辺部には遅く伝わる」(p.41)ことを明らかにし、「全国各地に中心部から各種メディアを経由して直接伝播するのでは

なく、いったん近隣の中核都市に伝播してから、その周辺部に広がる」(p.141)と分析した。また、若者語使用の地域差は、こういった伝播モデルの初期段階にあたるとしている。

地域差だけでなく、属性差についても言及した。女性の使用率が低い「ワンチャン」という若者語は、地理的分布では地域差が見られないものの、男女別にした地図(首都圏)を作成することで、女性だけ東京都中心に集中していると分析した。このことから、「属性ごとに分類して地理的分布をみると地域差があらわれ」(p.148)、前述のような普及過程を観察できるとした。

米川(1989)では、流行語の消滅について論じた。米川は、「寿命はおおよそ五～十年であろう。しかし中には「ハイカラ」のようにもう流行語ではないにしても、今も生きつづけて九十年になる語もあれば、「ダァ」のように昭和初期から二十年間使われた語もある」(p.224)と述べている。また、新語の定着についても述べており、「外国語からの借用語は定着、一般化が遅い」(p.226)と述べている。

3. 本稿の立場

本稿における研究は、従来の研究とはアプローチの仕方が異なる。これまでは、言語社会に生み出された新語をデータとして収集し、その構造から形成パターンを類推するという方法だった。それに対し本稿では、熟議という言語実験方法を用いて新語を生み出すプロセスを観察するという、これまでとは逆のアプローチをとっている。熟議とは、一つの課題に対して複数人が協力して話し合い、全員が納得する解決策を決定するという議論の型のことをいう。本稿において、提示された新語が既に存在していても参加者たちが知

らなかった場合、新語としている。

新語が形成されるプロセスやそれを観察する方法には多様なものがあると考えられるが、本稿では、新語形成プロセスを「新語が形成される場として「熟議」空間が存在し、その中で複数の参加者の熟議を通して新語が作り出されていく」ものと設定する。そして、参加者の言語行動を観察することによって、新語形成のダイナミズムを観察できるようになると考える。

語に焦点を当てるのではなく、それを作る人間、即ち熟議の参加者の言語行動を観察することになる。従って、発話だけでなく、頷きや笑いなどの言語行動も対象としている。そのため、それらも含めた談話単位として、新たに「表態」を設定し、「主体者の認識や意思が表出されている音声言語と行動の一まとまりのこと。他の人物の音声言語や行動が新たに現れることで区切られる。」と定義する。

以上のような方法をとることで、新語が生み出されるまでの形成プロセスだけでなく、どのような新語が捨てられ、どのような新語が選ばれるのか、また、これまで表出されなかった形成パターンも観察することが可能になるのではないかと考えている。

本稿における新語形成プロセスとは、「新語を形成し決定するまでの手順」のことを指し、従来の語形成プロセスとは区別する。

4. 言語実験方法

方法は、実験者(筆者)が想定したテーマに相応しい新語を、グループでの熟議を通して作るというものである。実験の時間は30分間で、その間に新語が決まらない場合は延長して、決まるまで話し合いを行った。テーマは以下の通りである。

テーマA：前から歩いてくる人にぶつかり
 そうになって、左右に避けたら
 またぶつかりそうになる現象
 テーマB：部屋の隅や路地裏などを、誰も
 いないのについで見してしまう現象

日常生活で多くの人が経験したことがあり、なおかつそれを表す一般的な言葉が存在しない行動をテーマにしている。参加者とグループは以下の通りである。

- グループ1：A(22歳・女性), B(21歳・女性),
 C(21歳・男性), D(21歳・女性)
 グループ2：A(21歳・男性), B(21歳・女性),
 C(21歳・男性), D(21歳・男性)
 グループ3：A(18歳・女性), B(18歳・女性),
 C(18歳・女性), D(18歳・女性)

参加者の出身地について、グループ1は、A・B・Cが山口、Dが長崎である。グループ2は、Aが埼玉、B・C・Dが広島である。グループ3は、Aが熊本、Bが山口、Cが静岡、Dが岡山である。¹

【表1】のように、収集した言語データでは、参加者はそれぞれA, B, C, Dのアルファベッ

トで表記している。実験者（筆者）はKで表記している（結果に余計な操作が加わらないよう実験そのものには参加していない）。また、言語データの直前の発話番号は、例えば「02003C」の場合、「02」が実験番号、「0003」が発話番号、「C」が発話者記号とそれぞれなっている。また、太字で示している語は、形成された新語である。

b>

また、左から「新語形成フェーズ(後述)」「表態(後述)」「言語行動」「中心となっている新語」の4つの項目に分けている。「中心となっている新語」とは、話題の中心となっている新語のことを指す。また、「新語形成フェーズ」が表れている部分、新語形成に関わる言語行動と思われる部分、提示された新語が話題となっている部分については、【表1】のように網掛けで表している。

5. 分析

5.1. 新語形成談話の構成要素

本節では、新語形成談話の構成要素である表態、言語行動、新語形成フェーズについて述べる。

【表1】分析表の各項目

新語形成フェーズ	表態	言語行動	中心となっている新語
	020001K:今日は本当にありがとうございます。 020002ABCD:(礼。) 020003C:そこからあるんですね。(笑う。) 020004ABCDK:(笑う。) (中略)		
	—実験開始—		
認知	020044C:そういう感じで。(笑う。)		
	020045ABCD:(2秒沈黙。)	停滞	
	020046AD:あっあっあっ。(体を左右に揺らしながら。)		
	020047C:あー。		
	020048A:すいませんって。 020049C:すいません。 020050A:うん…。うーん。 (中略)		
提案	020133D:思いやりの一致。	概括	思いやりの一致

5.1.1. 表態

本稿では、談話の流れを把握するために、表態という単位を設けている。談話における最小の単位として、発話が挙げられる。しかし本稿では、発話（音声言語）だけでなく、新語形成に関わると考えられる言語行動（笑いや顔きなど）も一つの単位として捉える。我々は、動きや表情などでも意思表示を行い、また相手の意思をある程度汲み取ることができる。コミュニケーションにおいて、これらは、言葉と同等の役割を担っていると考えられる。そのため、発話という単位では不十分とし、「表態」という談話単位を新たに設定した。その定義は、「主体者の認識や意思が表出されている音声言語と行動の一まとまりのこと。他の人物の音声言語や行動が新たに現れることで区切られる。」とする。

本稿では新語形成という限定的な談話であるため、新語に対する反応や、新語を形成しようと思案している状態と判断できる表情や動きは、たとえそれのみで行われていても一つの独立した単位とする。また、参加者の意思が反映されたものが表態と定義したが、【表1】の言語行動の項目に空白がある。意思が表出されている以上、何らかの言語行動が行われていると考えられるが、本稿では「新語の形成と賛否に直接的に関わると見られる言語行動」に限定している。

5.1.2. 言語行動

本節では、言語行動の側面から表態を分析する。ここでは、言語行動を「表態に表れた当事者の新語形成上の言語運用や意思表示」と定義する（cf. ネウストブニー（2003））。つまり、単なるコミュニケーションを円滑に進めるための発言や行動は除き（身振り手振りや発言そのものも言語行動として捉えられるが、本稿ではこれらを含めない）、あくまで

新語形成に直接的に関わると判断したものを選定している。また、先述の通り、従来言われてきた造語法のパターン（例えば、複合、省略など）も言語行動として捉える。

以下、いくつかの表態を挙げていく。まず、次のような表態を見られたい。

- (2) 020057A：ササッ。
020058D：ササッ。
020059A：サッ。
020060C：サッサッサッ。

これらは、テーマAの熟議である。これは冒頭の部分であるが、まずAが「ササッ」というオノマトペを発話している。それに誘発されて、D、Cもオノマトペを続けて発話している。この部分は、参加者が「オノマトペ化」という言語行動を取っていると言える。この直後の020061Aでは、オノマトペは発話されていないため、(1)に示した各表態で1つの言語行動となっていると言える。

次に、(3)を見られたい。

- (3) 020123C：自分さっきからさ、
020124A：うん。
020125C：思いやりーとすれ違いーが
（歌う。）
020126ABCD：（笑う。）
020127C：すげえもう、ずっと出てくるんやけど。交差する地点でー。（歌う。）
020128D：思いやりーと。（歌う。）

これらは、テーマAでの熟議である。ここでは、初めにCが全体に向けて発言した後、曲を歌っている。そして、Dもつられて歌っている。この部分は、曲の歌詞と熟議のテーマがリンクしている表態が集まっている。その

ため、ここは「引用」の言語行動を取っていると言える。

次に、(4)を見られたい。

(4) 060794B: (後頭部付近に両手を近づけて腕を伸び縮みさせるような動き。) モーンモーンモーンってことやろ?

060795A: そう。(後頭部付近に両手を近づけて腕を伸び縮みさせるような動き。) モーンモーンモーンモーン。

060796B: (後頭部付近に両手を近づけて腕を伸び縮みさせるような動き。) モーンモーンモーンモーン。

060797C: なんか発してない? それ。(笑う。)

060798B: ピピピピ。

060799A: ピピ!

060800B: そう!(笑う。)

060801A: (後頭部付近に両手を近づけて手のひらを開いたり閉じたりする動き。) ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピピピピピピピ、ピー(両手を開いてDに向ける)。

060802B: そうそれ!

これらは、テーマBでの熟議である。ここでは、まずAとBが体を使ってレーダーを表現している。これは、「誰もいないのにいる気配がする」というテーマの要素に基づいている。その後もAのレーダーでの例え方が相応しいか二人で確認している。そのため、これらは「比喩」の言語行動を取っているといえる。

次に、(5)を見られたい。

(5) 020388D: ミラー…うーん。(笑いながら首を傾げる。)

これらは、テーマAでの熟議である。ここでは、これ以前に出た「鏡」というキーワードを英語、つまり母語以外の言語に変換して新語を形成しようとしている。そのため、これは「非母語化」の言語行動を取っていると言える。

次に、(6)を見られたい。

(6) 050450D: あ、無意識に考えとったのか。

050451C: うん。

050452D: 常に。

050453C: なんか、どっかで考えるんじゃないかな? 考えて…無意識の人…無意識…。

050454ABCD: (4秒沈黙。)

050455A: **無意識の想像。**

これらは、テーマBでの熟議である。まず、Dが「無意識に考え」ているためテーマのようなことが起こると述べる。それに対してCが「どっかで考えるんじゃないか」と賛同する。それらの情報をまとめてAが「無意識の想像」という新語を形成した。そのため、050455Aは「概括」の言語行動を取っていると言える。

次に、(7)を見られたい。

(7) 030360D: それはなんか、上手く言い表せれんかね?

030361A: うーん、なんだろ?

030362ABCD: (5秒沈黙。)

030363A: バシッと決めたいね。

030364D: **お前もか現象。**

これらは、テーマAでの熟議である。ここでは、Dが「上手く言い表」したいと述べ、Aも「バシッと決めたい」という意思を述べている。それらに基づいて、Dが「お前もか現象」という新語を形成している。これは、テーマに内包されている「両歩行者が同じ向きに避ける」という要素から作られており、誰かに語りかけるような、口語的表現を利用している。そのため、030364Dは「セリフ化」の言語行動を取っているといえる。

次に、(8)を見られたい。

- (8) 030658A：例えばさ、いいじゃ、例えばさ、決まったわけじゃないけどこういう現象をお前もか現象と言います。しかし、これは日本人に多くに、なんか見られる現象から別名大和魂。

030659ABCD：(笑う。)

- 030660C：お前もか現象括弧大和魂〔表記するとお前もか現象(大和魂)〕って書いて(笑う。)

これらは、テーマAでの熟議である。030658Aと030660Cは、これ以前に形成した「お前もか現象」と「大和魂」という新語が、同義の意味を持った新語だとみなしている。そのため、これらは「同一化」の言語行動を取っているといえる。

次に、(9)を見られたい。

- (9) 040562BC：前から歩いてくる人におつかりそうになって左右に避けたらまたぶつかり

そうになる現象。

040563C：略す？

040564ABD：(笑う。)

040565B：アルファベット、アルファベットみたいな？

040566C：(ホワイトボードを指して) あそこ、あそこ縦に読んで^{まえ}前そま現象。

これらは、テーマAでの熟議である。まず、Cがテーマの文を省略しようと提案し、Bが頭文字を抽出するのか訊いている。それに基づいて、Cがテーマの文から頭文字を抽出(ホワイトボードには3行使って、「前から歩いてくる人におつかり／そうになって左右に避けたら／またぶつかりそうになる現象」としたため、各行の頭文字を抽出)し、「前そま現象」という新語を形成した。そのため、040563C～040566Cは「省略」の言語行動を取っているといえる。

次に、(10)を見られたい。

- (10) 040588B：前(まえ)そま。(笑う。) かわいいやん。ぜんそまでもよくない？

040589C：あ、ぜんそま。

040590B：ぜんそま。でも、まえの方が言いやすいよね。

040591C：まえそまの方がいいかな。

これらは、テーマAでの熟議である。ここでは、以前に形成された「前そま現象」の「前」という漢字を訓読みの「まえ」から音読みの「ぜん」に転換するかどうか話し合っている。そのため、これらは「音声転換」の言語行動を取っているといえる。

次に、(11)を見られたい。

- (11) 070744C：空目だよねもう。
- 070745B：空目？
- 070746D：空目。
- 070747A：空目？
- 070748B：空目現象？
- 070749C：そらまめ。

これらは、テーマBでの熟議である。070744Cで「空目」という新語を形成し、070748Bまでは「空目」という語の確認を取っている。そして、070749Cでは「空目（そらめ）」に類似した音を持つ「そらまめ」という単語を提示した。そのため、070749Cは「掛詞化」の言語行動を取っているといえる。

次に、(12)を見られたい。

- (12) 041245A：ごめんね現象。
- 041246B：うーん。
- 041247C：ごめんなさいね現象の方がちょっと嫌味があって面白い。

これらは、テーマAでの熟議である。041245Aで「ごめんね現象」という新語を形成している。この新語の「ごめん」という語を抽出し発展させ、041247Cで「ごめんなさいね現象」という新語を形成した。そのため、041247Cは「派生」の言語行動を取っているといえる。

次に、(13)を見られたい。

- (13) 020175ABCD：(7秒沈黙。)
- 020176C：何やろねー。
- 020177ABCD：(5秒沈黙。)

これらは、テーマAでの熟議である。ここでは、まず全員が7秒間沈黙している。そして、Cが「何やろねえ」と他の参加者に呼びかけ、

その後また全員が5秒間沈黙している。ここでは、新語形成の熟議が行き詰っていて、次の議論へ進めるための新たな情報を思索している状態である。そのため、これらは「停滞」の言語行動を取っているといえる。

次に、(14)を見られたい。

- (14) 020575A：歩行時意気投合現象。
- 020576D：あーなるほどね。(笑う。)
- 020577A：意気投合っていうか、なんか違う。

これらは、テーマAでの熟議である。ここでは、まずAが「歩行時意気投合現象」という新語を提示し、Dがそれを「なるほどね」と受け入れている。そのため、これは「賛成」の言語行動と言える。それに対し、Aが「なんか違う」と否定しており、これは「拒否」の言語行動と言える。

以上、他のものも含めて、本実験に現れた言語行動をまとめると、以下のようになる。

- 賛成……………提案された新語に対する肯定的な反応。
- 拒否……………提案された新語に対する否定的な反応。
- 停滞……………議論を中断し、新語形成に関する思索をしている態度。
- 比喩……………議論のテーマとなっている行動を人物・物・事柄などで例える。
- 引用……………小説や歌詞、人物が発言したもの等を参考にする。
- 非母語化……………母語（日本語）ではない言語に変換する。またはその意志。

オノマトベ化…議論のテーマとなっている行動のオノマトベを抽出する。

音声転換………同じ漢字の読みを別の読み方に替える。

掛詞化………類似した音を持つ言葉に変換して新語を作る。

複合………複数の単語を組み合わせて一つの単語を形成する。

セリフ化………誰かに語りかけるような、口語的表現を利用して新語を形成する。

省略………文や単語を簡略化しより短い単語を形成する。またはその意志。

混成………複合語の一部を組み合わせる。

同一化………複数の新語を同義の言葉とみなして一つに分類すること。

派生………特定の語を共有する新語を複数形成する。

並び替え………複数の語で形成された新語の要素となっている語の順番を並び替る。

字形の選択………新語の表記をカタカナ、平仮名、漢字のいずれかから選択する。

概括………他の言語行動に当てはまらず、今までの会話や自らの経験などから、議論のテーマとなっている行動の要点を簡潔な言葉でまとめる。

さらに、以上の言語行動はいくつかのグループに分類できる。

まず、セリフ化・複合・省略・派生・並び替えは、語と語を組み合わせたたり、あるいは短くしたり、新語の文体を変えたり、複合語の要素を並び替えたり、語を共有したりといった、語の形態を意識した言語行動である。これらは「形態操作」というグループに分類できる。形態論的な観点から設定しており、「[語]という言語単位レベルで操作を行っている」と判断できる言語行動がこれに当たる。

同一化・概括は、情報をまとめて一つの語を形成する言語行動である。これは「統括操作」というグループに分類できる。

オノマトベ化・音声転換・掛詞化・混成は、テーマの行動から擬音を抽出したり、類似している、あるいは共通の音を意識するといった、音声に関する言語行動である。これは「音声操作」というグループに分類できる。

比喩・引用・非母語化は、何かに例えたり、文学や映像などのメディアから情報を持って来たり、母語（日本語）以外の言語に変換したりといった、他の言語行動よりも情報探索の範囲を広げて情報を得る言語行動である。これらは「拡張操作」というグループに分類できる。

字形の選択は、新語の表記を平仮名・カタカナ・漢字から選択する言語行動である。これは「表記操作」というグループに分類できる。

以上の形態操作、統括操作、音声操作、拡張操作、表記操作は、熟議の参加者が主体的に新語を形成しようとする言語行動である。つまり、これらの言語行動は、参加者が情報を与える立場に立ったときに、その発言から確認することができる。従って、「与え手の言語行動」と言うことができる。

一方、賛成と拒否の言語行動は新語の決定に関わる言語行動であり、新語が出された後に現れる反応である。つまり、提示された情

報を受け取った際に現れる言語行動である。従って、このような他者の発言の後に行われる言語行動のことを「受け手の言語行動」と言うことができる。

さらに、停滞の言語行動は、参加者全員が新語形成に行き詰り、案を出すために思索している言語行動である。これは、与え手や受け手に関係無く、参加者全員がほぼ同時に行う言語行動である。従って、「共同の言語行動」と言うことができる。

以上、上記の言語行動をまとめると、【表3】のようになる。

5.1.3. 新語形成フェーズ

本稿で取り扱う談話には、「新語を決める」という一つの目的があり、それに向かって参加者達は熟議を進める。そこで、新語の最終的な決定までにある種の段階的な作業工程を経ているのではないかと考え、それを表す新たな談話単位として「新語形成フェーズ」という単位を設定した。その定義は、「表態の一まとまりで、新語の形成から決定に至るまでの工程。連続する複数の表態で表すこともあれば、一つの表態で表すこともある。新語形成における談話の構造を統括している動態的な単位。」とする。話段と類似しているが、話段は話題によって切り替わるとされているが、新語形成談話は一つのフェーズに複数の

話題が含まれていることもある。話題ではなく、新語形成における工程によって区切っている点で話段と新語形成フェーズは異なる。

次に、(15)を見られたい。

- (15) 030676C：譲り合うというよりは
 030677B：うん、一歩引く。うん。
 030678A：うん。
 030679C：どう考えても防御本能で避けてるような気がするんだけど。
 030680AB：あー。
 030681D：確かに。

(15)は、テーマAでの熟議である。ここでは、Cがテーマとなっている行動を、より具体的に説明している。それに対し、A・B・Dが同意している。この段階は、新語形成の準備段階にあたり、テーマの内容をより具体的に「認知」しようとしている。従って、この「認知」を1つの工程、即ち新語形成フェーズと見なすことにする。

次に、(16)を見られたい。

- (16) 020080C：どれぐらいの文字かな？
 020081B：一言とか？
 020082A：チャララランくらい。
 020083BD：(笑う。)

【表2】言語行動の分類

与え手の言語行動	形態操作・・・セリフ化・複合・省略・派生・並び替え
	統括操作・・・同一化・概括
	音声操作・・・オノマトペ化・音声転換・掛詞化・混成
	拡張操作・・・比喩・引用・非母語化
	表記操作・・・字形の選択
受け手の言語行動	賛成・拒否
共同の言語行動	停滞

020084C：チャラランチャンチャン
みたいなの。

(16) は、テーマAでの熟議である。ここでは、まずCが「どれぐらいの文字」なのかという問いを参加者に発している。それに対して、他の参加者が目安を提案している。この段階も、新語形成の準備段階であり、これから形成していく新語の「枠組み」を決めている。従って、この「枠組み」を新語形成フェーズと見なすことにする。

次に、(17) を見られたい。

(17) 020397C：まねっこ現象。(笑う。)
020398A：まねっこ現象。(笑う。)
020399BD：(笑う。)
020400C：でもなんか、分かる。分かるかもしれない。
020401A：うん。み…ち…。

(17) は、テーマAでの熟議である。ここでは、まずCが「まねっこ現象」という新語を形成している。それに対しABDは笑う。そして、Cが「分かるかもしれない」と肯定的な発言をし、Aも「うん」と、それに同意している。020397Cは、考案した新語を提案している段階にあたる。そして、その後の020398A～020401Aは、形成した新語がテーマに相応しいか審議している段階である。よって、これらの段階をそれぞれ「提案」「審議」の新語形成フェーズと見なす。

次に、(18) を見られたい。

(18) 020577A：意気投合ってというか、なんか違う。
なん…(Kに向かって) あと何分ですか？
020578K：あと7分くらい。

020579B：(笑う。)
020580A：やばい。結構経ったな。
020581C：はっ。でも結構いけそうよね。

(18) は、テーマAでの熟議である。ここでは、Aが実験の残り時間を気にする発言をしている。この段階は、これまでの会話の流れから「脱線」しており、新語形成とは直接的な関わりは無いが、熟議を構成する一つの要素として捉える。よって、これを「脱線」の新語形成フェーズと見なす。

以上、新語形成フェーズをまとめると以下のようなになる。

認知……テーマの内容について話し合っている場面
枠組み…形成する新語の語形や読み、テーマを表現するのに相応しい構成要素について話し合う場面
提案……考えついた新語を提示する場面
審議……提示された新語が相応しいか話し合う場面
脱線……本題とは関係の無い話をしている場面

上述のように、新語形成フェーズは言語行動とは異なるものとして仮定している。従って、1つの新語形成フェーズが複数の言語行動に対応する可能性がある。これについては、5.3で述べる。

5.2. 新語形成フェーズの流れ

新語形成フェーズは途切れることなく、それぞれを行き来しながら常に連続している。この連続にはある規則性が存在する。

【表3】を見ると、新語形成フェーズは認知

から始まり枠組みへと繋がっている。これは、全ての実験データに共通することである。そして、この二つを行き来するというプロセスを経て、提案が起きる。これは、新語を形成するために必要な情報を収集するためという意味があると考えられる。さらに、参加者同士の共通理解を深めた上で新語を提示しなければ混乱を招く恐れがあり、それを予防するためでもあるだろうと考えられる。つまり、認知によるテーマの性質・特徴の理解と共有、そして枠組みによる新語の語形、語種、読み の選定といった段階を経てようやく提案が起こるといえる。

熟議の序盤は、認知や枠組みが繰り返し起きることが多い。熟議が始まったばかりの状態では、新語形成に必要な情報が少ないため、

情報の収集と共有を行わなければならない。そのため、序盤に認知と枠組みに時間をかけることとなる。

熟議の終盤になると、情報量はある程度集まっており、参加者間でも十分に共有できている。また、新語も複数形成されている。情報が十分に行き渡ると、これまで形成された新語を振り返り、最終的な決定を行おうという意識が参加者達に生まれるのだろう。そのため、熟議の終盤には審議が増えるのだと考えられる。しかし、どの程度で情報量が十分に行き渡ったと考えるかは、グループによって異なると考えられる。

5.3. 言語行動と新語形成フェーズの結びつき

各新語形成フェーズには、それぞれ結びつ

【表3】 実験開始直後の新語形成談話

	—実験開始—	
認知	020044C: そういう感じで。(笑う。)	停滞
	020045ABCD: (2秒沈黙。)	
	020046AD: あっあっあっ。(体を左右に揺らしながら。)	
	020047C: あー。	
	020048A: すいませんって。	
	020049C: すいません。	
	020050A: うん…。うーん。	
	020051C: どうやって決めればいいんかな？からじゃない？	
	020052A: どうやって決め…。	
	020053D: 音…。	
枠組み	020054A: あっ。	オノマトペ化
	020055D: うん。あの、どういあれでもいいんよね？	
	020056C: うん。	オノマトペ化
	020057A: ササッ。	
	020058D: ササッ。	

【表4】 実験終盤の新語形成談話

審議	020708C: 「まねっこ現象」かな、もう。	賛成	まねっこ現象
	020709A: (笑う。)		
枠組み	020710D: ササッ。まねっこ。	オノマトペ化	
提案	020711C: ササつまねっこ…。あつ。「歩行時ササつまねっこ現象」。	オノマトペ化・複合	歩行時ササつまねっこ現象
審議	020712ABCD: (笑う。)	賛成	
	020713A: 可愛い！		
	020714C: まあでも分かるよね。		
提案	020715D: 「歩行時まねっこ現象ササ」。	並び替え	歩行時まねっこ現象ササ
審議	020716ABCD: (笑う。)	賛成	
	020717B: 現象まで言い終えた後にプラスで。		
	020718A: いいと思う。		
	020719D: 溢れ出した感じ。		
	020720C: 分かるもん。「ササつまねっこ現象」で。		

きの強い言語行動が存在する。

【表5】は、テーマAでの会話である。ここでは、テーマAと曲の歌詞を関連づけて新語を形成しようと考えている場面である。020125Cで歌っていることから確認できる。テーマと歌詞をリンクさせて考えていることから、これは認知のフェーズであり、引用の言語行動を取っているといえる。

認知は、主に実体験に基づいて議論のテーマとなっている行動の特徴や性質を探し、それらを分かりやすく参加者どうしで共有する展開である。引用は、自らが体験した、あるいは見聞きした物事からしか情報を持つてくることはできない。そのため、引用の言語行動は認知と関わりが強いのだと考えられる。

【表6】は、比喩によってテーマAと反復横跳びの動きを関連づけ、新語形成に必要な構

成要素を提示している場面である。よって、これは枠組みのフェーズであり、比喩の言語行動を取っているといえる。

【表7】は、テーマAに含まれる「歩く」という成分を英語に変換し、新語形成に必要な要素を探している場面である。そのため、これは枠組みのフェーズであり、非母語化の言語行動を取っているといえる。

【表8】は、テーマAでの会話である。「思いやり」に続く言葉を探しており、テーマの「避ける」という動きから、「サッサッ」というオノマトペを抽出している。そのため、これは枠組みのフェーズであり、オノマトペ化の言語行動を取っているといえる。

【表9】は、4.1.1の(9)で述べた通り、音声転換となる。また、新語の読みに関する会話であるため、これは枠組みのフェーズであ

【表5】 認知の新語形成フェーズと引用との結びつき

認知	020123C: 自分さっきからさ、	引用	
	020124A: うん。		
	020125C: 思いやりとすれ違いが(歌う。)		
	020126ABCD: (笑う。)		
	020127C: すごえもう、ずっと出てくるんやけど。交差する地点でー。(歌う。)		
	020128D: 思いやりと。(歌う。)		

【表6】 枠組みの新語形成フェーズと比喩との結びつき

枠組み	030463B: 反復横跳び!	比喩	
	030464A: 反復横跳び…。		
	030465C: 誰も反復横跳びせんくない?(笑う。)		
	030466B: (笑う。)		
	030467C: 目の前でさ、スタスタスタってやることない。(笑う。)		

【表7】 枠組みの新語形成フェーズと非母語化との結びつき

枠組み	020593D: ウォーキング…。	非母語化	
	020594C: バージョンウォーキング。		
	020595A: ウォーキングイン…。		
	020596D: ウォーキングバージョン。(笑う。)		
	020597C: ウォーキングバージョン。(笑う。)		
	020598A: ウォーキングバージョン。(笑う。)		
	020599B: (笑う。)		
	020600A: インウォーキング? アウトウォーキング?		

【表8】 枠組みの新語形成フェーズとオノマトペ化との結びつき

枠組み	020375B: でもそうなるよ、思いやり、の後に続く言葉が違くなりそうやし。	オノマトペ化	
	020376C: サッサッ。		
	020377A: うん。		

る。

【表10】は、4.1.1の(8)で述べた通り、省略となる。これは、新語の語形に関する会話であるため、枠組みのフェーズとなる。

【表11】はテーマAでの会話である。020726B~020728は、これ以前に形成した「歩行時まねっこ現象ササッ」の「ササッ」というオノマトペの表記を半角にするかどうか話し合っている。新語の表記についての会話であるため、これは枠組みのフェーズであり、字形の選択の言語行動を取っているといえる。

枠組みは、どんな言葉を使って新語を形成するか、また、新語の読みをどうするかを話し合う展開である。そのため、何かに例えて

構成要素を提示する比喩であったり、語形や語種、読みに関わる非母語化・オノマトペ化・音声転換・省略・字形の選択といった言語行動をよく使用するのだろうと考えられる。²

【表12】は、テーマBでの会話である。060597Dは、新語を提示しているため、提案のフェーズとなる。形成された新語は、「索敵」と「癖」の二つの単語を組み合わせて新語を形成している。そのため、これを複合とする。

【表13】は、テーマAでの表態である。これは新語を提示している場面であるため、提案のフェーズとなる。ここでは、以前に形成された「相互回避現象」「お前もか現象」という2つの新語が、同一の意味をもった言葉だと認めている。そのため、これを同一化と

【表9】 枠組みのフェーズと音声転換との結びつき

枠組み	040588B: 前(まえ)そま。(笑う。)かわいいやん。ぜんそまでもよくない?	音声転換	前そま現象
	040589C: あ、ぜんそま。		
	040590B: ぜんそま。でも、まえの方が言いやすいよね。		
	040591C: まえそまの方がいいかな。		

【表10】 枠組みの新語形成フェーズと省略との結びつき

枠組み	040563C: 略す?	省略
	040564ABD: (笑う。)	
	040565B: アルファベット、アルファベットみたいな?	

【表11】 枠組みの新語形成フェーズと字形の選択との結びつき

審議	020723D: 「歩行時まねっこ現象ササッ」。(笑う。)	歩行時まねっこ現象ササッ
	020724B: (笑う。)	
	020725A: 歩行時…。	
枠組み	020726B: 半角…。(笑う。)	字形の選択
	020727D: 半角カタカナ。(笑う。)	
	020728A: (笑う。)	

【表12】 提案の新語形成フェーズと複合との結びつき

認知	060589ABCD: (3秒沈黙。)	停滞	
	060590A: うーん。		
	060591D: 昔の、しゅ、なんだろう? 本能の名残だよね多分。昔の生活の名残だよね。		
	060592A: うん。		
	060593C: なんか、手癖とか口癖みたいなもんだよね。(笑う。)		
提案	060594D: (笑う。)	複合	索敵癖
	060595C: なんか、自然とやっちゃってるみたいなの。		
	060596A: うーん。		
	060597D: あれか、「索敵癖」か。		

【表13】 提案の新語形成フェーズと同一化との結びつき

提案	030717B: あ、こう、「相互回避現象」通称「お前もか現象」。	同一化	相互回避現象 通称 お前もか現象
----	-----------------------------------	-----	---------------------

する。

【表14】は、テーマBでの会話である。070171Cは、新語を提示しているため、提案のフェーズとなる。で形成された新語は、「そこにいるの」という日常会話でよく用いられる言語表現を用いて新語を形成している。そのため、これをセリフ化とする。

【表15】は、テーマAでの会話である。041247Cと041253Bは新語を提示しているため、提案のフェーズとなる。また、4.1.1.の(11)で述べた通り、派生となる。

【表16】は、テーマAでの会話である。020711Cと020715Dは、新語を提示しているため、提案のフェーズとなる。020715Dは、020711Cの「歩行時サッサまねっこ現象」の文中にある「サッサ」を語末に移動させてい

る。そのため、これは並び替えの言語行動を取っているといえる。

【表17】は、テーマBでの会話である。070613Cと070616Cは、新語を提示しているため、提案のフェーズとなる。それぞれ形成された新語は、以前に行われた「テーマの行動は夜道を歩いている際に起こる」という話し合いに基づいている。これは、テーマの特徴を簡潔にまとめて新語を形成している。そのため、これらを概括とする。

複合・同一化・セリフ化・派生・並び替え・概括の言語行動は、提案で現れることが多い。つまり、これらは新語を提示してようやく確認できる言語行動であると言える。このことから、これらの言語行動は、これまでの熟議によって得られた情報を利用して行われ

【表14】 提案の新語形成フェーズとセリフ化との結びつき

枠組み	070166A: 見る。その現象 070167C: 見ちゃう現象。 070168B: んー。 070169C: そこにいるの? 070170ABCD: (笑う。)		
提案	070171C: 「そこにいるの現象」?	セリフ化	そこにいるの現象

【表15】 提案の新語形成フェーズと派生との結びつき

提案	041245A: 「ごめんね現象」。	セリフ化	ごめんね現象
審議	041246B: うーん。	拒否	
提案	041247C: 「ごめんなさいね現象」の方がちょっと嫌味があて面白い。	派生	ごめんなさいね現象
審議	041248A: ごめんなさいね。		
	041249C: ふん。(語気を強めて)ごめんなさいね。		
	041250ABD: (笑う。)		
	041251B: (笑いながら)言い方。 041252D: 言い方の問題じゃん。	拒否	
提案	041253B: 「どうもごめんなさいね現象」。	派生	どうもごめんなさいね現象

【表16】 提案の新語形成フェーズと並び替えとの結びつき

提案	020711C: サッサまねっこ…。あつ。「歩行時サッサまねっこ現象」。	オノマトペ化・複合	歩行時サッサまねっこ現象
審議	020712ABCD: (笑う。)		
	020713A: 可愛い!	賛成	
	020714C: まあでも分かるよね。		
提案	020715D: 「歩行時まねっこ現象サッサ」。	並び替え	歩行時まねっこ現象サッサ

【表17】 提案の新語形成フェーズと概括との結びつき

提案	070613C: 「夜の一人道現象」。	概括	夜の一人道現象
審議	070614D: (笑う。)	賛成あるいは拒否	
	070615A: 一人道。(笑う)		
提案	070616C: 「夜の帰り道一人あるある」。	概括	夜の帰り道一人あるある

るものだということがいえるのではないだろうか。つまり、既出の認知と枠組みを総括し、新語を形成する言語行動だといえる。

以上のことから、比喩・引用・非母語化・オノマトペ化・音声転換・省略・字形の選択は新語形成のための情報源にもなるもので、複合・同一化・セリフ化・派生・並び替え・概括は、これまでの段階で出された情報に基づいて行われる言語行動であるといえるだろう。

【表18】は、「空目」という新語に対する評価をしているため、審議のフェーズとなる。「空目」という言葉は既に存在している語であるが、参加者が知らなかったため新語と認定した。

071202A~071207Dは、「好き」や「言いやすい」などの肯定的な反応を示している。そのため、これらは賛成とする。それに対し、071208C~071210Aは「空目」という単語が既に存在しているのではないかと危惧しており、やや否定的な反応を示している。そのため、これを拒否とする。

審議では、形成された新語がテーマに相応しいかを話し合う展開である。そのため、肯定や否定を表す賛成や拒否の言語行動との結びつきが強い。これは当然の帰結だろう。

5.4. 停滞による切り替え

停滞の前後で新語形成フェーズの切り替えが起こることが多い。特に、認知または枠組

みから提案または審議に、審議から認知または枠組みに移行するときに、きっかけとして現れることが多い。その例を、以下に提示する。

認知と枠組みは、新語の形成工程にあたるフェーズである。それに対し、提案と審議は形成工程を経た後に現れるフェーズである。つまり、停滞という言語行動は、「新語を形成するまでの過程に関する議論」と「形成された新語に関する議論」との切り替えの際に現れるといえる。別の議論に移行するためには、新たな情報を提示する必要がある。停滞は、個々人が新語形成に関する様々な思索を行い、情報を詮索している状態だと考えられる言語行動である。これまでの議論によって得られた他の参加者の意見に基づいて熟考することで、個人の中で新たな解釈が生まれるのだと考えられる。そのため、停滞の直後にフェーズの切り替えが起きるのではないだろうか。

あるいは、停滞によって「新たな議論へ移行する」という合図を示しているとも考えられる。停滞は熟考を示す言語行動でもあるが、それと同時に議論の行き詰まりを表す言語行動でもある。そのため、その状態を打破するために、新たな話題で議論を進めようという意識が参加者達の中で生まれているのかもしれない。しかし、これはまだ推測の域を出ないため、今後も調査と分析を行っていく。

【表18】 審議の新語形成フェーズと賛成・拒否との結びつき

審議	071202A:「空目」が好き。	賛成	空目
	071203C:「空目」いいよねー。		
	071204D:「空目」言いやすいね。		
	071205C:空目しっくりきた。		
	071206B:え、じゃあ「空目」?		
	071207D:いいんじゃない?	拒否	
	071208C:その言葉が無ければね。		
	071209D:んーでもありそうな気が。		
	071210A:ありそうな気がする。		

【表20】 停滞による新語形成フェーズの切り替え

提案	020457A:「ミラーリング」。(020486B以降「ミラーリング現象」の評価をしており、これは「ミラーリング現象」の「現象」を省略したものと捉える。)	比喩・非母語化	ミラーリング現象
審議	020458ABCD:(笑う。)	拒否	
	020459D:「ミラーリング」。ああ。		
	020460B:ありそう。		
	020461D:「ミラーリング」。		
	020462C:そのなんか、ちょっと。		
	020463A:「ミラーリング」ってあるんかな？		
	020464D:なんか、ありそうで怖いよね。		
	020465A:じゃあ？		
	020466D:それをさ、		
	020467A:うん。		
020468D:造語やしていうの恥ずかしいよね。			
020469A:ね。			
020470B:なんか、別の意味でそれほんとにあるよって言われそう。			
020471A:ね。「ミラーリング」ってさ、あったらどういう意味なんやる？ほんとに。			
020472C:まあいいんじゃない？			
020473A:いいんかな？			
020474C:うん。			
020475D:「ミラーリング」。			
枠組み	020476A:自分たちで作っちゃいけない…あ、でも。	停滞	
	020477D:いやでも、造語でいいんよ。		
	020478A:造語作るんか。そっか。		
	020479C:うん。どうやって作るつもりやったん？(笑う。)		
	020480A:(笑う。)		
	020481C:なんかでも、何個か出とるね。割と。		
020482A:うん。			
020483C:絞れたの、絞れたってか、ちょっと違うかもしれんけど、絞られた感じ。			
020484ABCD:(5秒沈黙。)			
審議	020485C:ミラーアイエヌジー。ミラーがなんかちょっと。		
	020486B:(笑う。)[「ミラーリング現象」ってありそう。		

【表21】 停滞による新語形成フェーズの切り替え

認知	040628B:なんだろね。うーん。	停滞	
	040629D:んー。		
	040630ABCD:(5秒沈黙。)		
	040631D:(小声で何かつぶやく)		
審議	040632ABCD:(3秒沈黙。)	賛成	
	040633D:(笑う。)		
	040634B:ん？		
	040635A:前そま。		
	040636B:「前そま現象」？		
	040637ABCD:(笑う。)		
040638B:一番しっくりくるんやないん？			

【表22】 停滞による新語形成フェーズの切り替え

認知	050445C:よくするよ。	停滞	
	050446D:よね。		
	050447C:自分よくする。練習んときとかむっちゃしよるやん。(笑う。)		
	050448A:あつ。ね。		
	050449C:うん。		
	050450D:あ、無意識に考えとったのか。		
	050451C:うん。		
枠組み	050452D:常に。	停滞	
	050453C:なんか、どっかで考えるんじゃないかな？ 考えて…無意識の人…無意識…。		
提案	050454ABCD:(4秒沈黙。)	概括	無意識の想像
審議	050455A:「無意識の想像」。	拒否	
	050456C:「無意識の想像」って違うくない？(笑う。)		

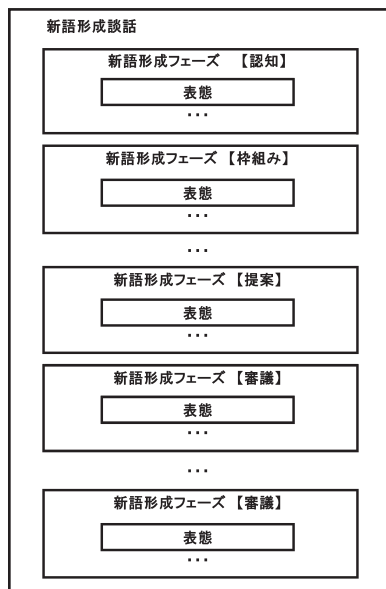
【表23】 停滞による新語形成フェーズの切り替え

枠組み	020320C: 何て言うんやろね、鏡のやつ。	比喻	
	020321A: 鏡。 020322C: 鏡っぽいよね確かに、でも。 020323B: うん。		
認知	020324A: うん…うん。そっか。なんか、他人やけど同じ思考の下で	停滞	
	020325D: うん。		
	020326C: ん？あ、そういうことね。		
	020327A: うん。		
	020328B: あんとき、気が合つてる気がするもん。		
	020329A: そう。		
	020330D: 気が合つてる気がするよね。		
提案	020331ABCD: (10秒沈黙。)	概括	他人との意気投合
	020332C: 何だろうねえ。 020333A: 「他人との意気投合」。		

6. まとめ

本稿では、熟議という言語実験方法を用い、表態と新語形成フェーズという談話単位を設定し、その熟議の構造を把握することで、新語を形成するプロセスも把握することができた。その結果として、新語形成における談話は必ず認知から始まり、その後枠組みを経て提案へと繋がるということがわかった。これは、新語を形成する前にそのための情報を収集するためと考えられる。新語形成談話の構造を図に表すと以下ようになる。

【図1】 新語形成談話の構造



「…」は、表態や新語形成フェーズが連続して現れることを示している。

また、認知は新語の経験に関わる言語行動と、枠組みは新語の語形や語種、読みに関わる言語行動と、提案は認知と枠組みを総括する言語行動と、審議は新語の決定に関わる言語行動との結びつきがそれぞれ強いことが分かった。これらの結びつきを図で表すと以下のようなになる。

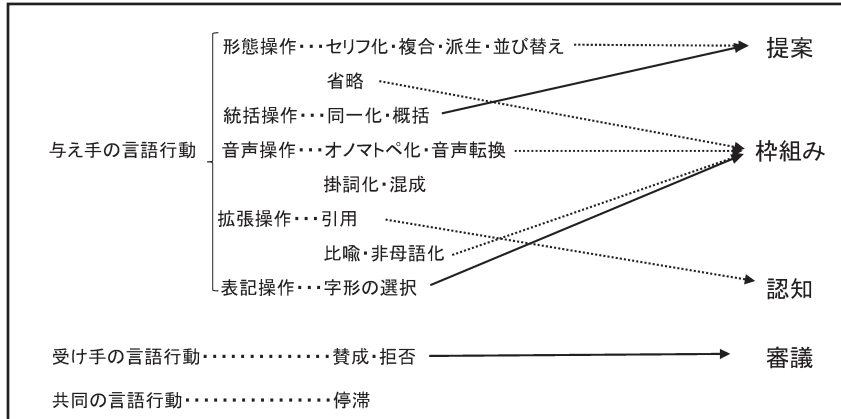
【図2】では、分類したカテゴリそのものとの結びつきが強いものは実線で、個別の言語行動と結びつきが強いものは点線で示している。

また、停滞の言語行動は新語形成フェーズの切り替えの際に多く現れ、これは「新語を形成するまでの過程に関する議論」と「形成された新語に関する議論」との切り替えのスイッチとなっているともいえる。

7. おわりに

本稿では、熟議という独自の実験方法を用いて新語が形成される段階を観察した。このような実験的な研究はこれまで行われていなかったため、新語研究や語形成研究において、意義のある結果となったのではないだろうか。また、方法論においても、熟議という方法を用いることで、これまで表には出て来な

【図2】 言語行動と新語形成フェーズの結びつき



かった形成パターンを確認できる可能性があり、熟議参加者が行う形成パターンや新語の取捨選択を観察できるのではないかと考えられる。しかし、本稿ではそこまで扱えなかった。

また、新語研究で扱われる伝播や廃語化という問題については、本研究での実験方法では取り扱えないという問題点がある。また、この実験方法が「実際の言語社会での新語形成のプロセスに即しているか」という問題については曖昧性が残る。しかし、新語形成プロセスを観察するには、実際の自然談話を観

察することが最も適した方法だと考えられるが、それを実行することは不可能に近い。ため、今回の実験のように限りなく自然談話に近い談話を観察するしかないだろうと考えている。そのため、この実験方法が現段階で考え得る最も適した方法なのではないかと考えている。今後の課題として、より適した実験方法がないか熟考していく。

これらの他にも、参加者の性別や年齢などの社会的な問題を扱っていないなどの問題点もあるため、今後も同様の言語実験を行い、分析を進めていきたい。

注

- 1 参加者の属性について、今回は考慮していない。性別や出身地などの属性が談話に影響すると考えられるが (cf. 井上 (2014)), 本稿では扱わない。
- 2 SNSの普及により、新語は音声言語のみで扱われるものではなく、文字言語としても扱われる機会が増えてきている。そのため、語種や語形の選択は、新語の見たいも意識して行っているのではないかと推察している。表11における「020727D:半角カタカナ。(笑う。)」からも窺うことができる。しかし、分析・考察が不十分であるため、今後の課題とする。

参考文献

- 井上文子 (2014) 『国立国語研究所共同研究報告 13-04 方言談話の地域差と世代差に関する研究成果報告書』国立国語研究所
- 影山太郎・斎藤倫明 (2013) 「語種と語形成」『レキシコンフォーラム No.6』影山太郎編 ひつじ書房 pp19-41
- 窪田晴夫 (2002) 『もっと知りたい!日本語 新語はこうして作られる』岩波書店
- 斎藤倫明 (2002) 「第5章 語構成原論」『朝倉日本語講座4 語彙・意味』北原保雄監修/斎藤倫明編 朝倉書店 pp.110-128
- 佐久間まゆみ (2010) 「文章・談話の分析単位」『『言語』セクション 第1巻』月刊『言語』編集部編 大修館書店 pp.93-100
- 鏈水兼貴 (2013) 「『全国若者語調査』における言語伝播モデル」『国立国語研究所共同研究報告 13-02 首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書 首都圏言語研究の視野』国立国語研究所 pp.129-152
- 米川明彦 (1989) 『新語と流行語』南雲堂
- 米川明彦 (1996) 『現代若者ことば考』丸善株式会社
- ネウストプニー, J.V. (2003) 「日本の言語行動の過去と未来」『朝倉日本語講座 9 言語行動』萩野綱男編 朝倉書店 pp.1-28